

全く身近な存在であった。その人たちの写真を見ていたし、クリスマスが近づくとカナダから大きな小包がとどいた。小さな小包は、私たちがいぬいに宛てられていた。

私は近所の男の子とパッチン（東京でいうめんこ）をして遊んだ。ハーバートもしただろうと思う。日本では今もやっているだろうか。私は年かさになってまわりの案内がわかるようになると、長野の市街を何の心配もなく歩いた。両親は私たちが安全なことを知っていて、もし何か事故がおきても親切な日本人が家まで連れてきてくれるとわかってきた。私が少年の頃から覚えている不愉快な事件が一つだけある。私は何人かの年上の男の子と刈り入れのすんだ田圃に立って凧あげをしていた。すると突然、一人の老人が近づいて来て私の手から凧をひったくったかと思うと、荒々しく引き裂いてしまったのだ。突然のことであり、恐ろしい剣幕にすっかり脅えて、私は泣き出してしまった。日本人の友達を私をなだめ慰めて、家まで送ってくれた。

その頃、長野にはカナダ人がもう一家住んでいた。それは英国教会の牧師ジョン・ウォラー博士と家族の人たちであった。息子のウイルフレッドとゴードンが私たちの年頃であった。毎週土曜日になると、私たちはお互いに訪問し合った。たとえば今週は「ウォラーの子供」たちがこちらの家へ来ると、次の週には私たちが先方へいくという風であった。この子供たちの姉のキクは私たちよりずっと



長野に住んでいた頃のノルマン一家。右端が筆者、一番前にいるのが弟のハーバート。（大窪憲二氏提供）

年上だったが、ハーバートはこの人に憧れていて、一マイルばかりある道のりを独りでウォラー家まで訪ねていくのであった。キクはハーバートの気持をひきつけて、思うように仕向けるのが好きだった。

父はとても忙しい人だった。いま、手紙を書いたり説教の下準備をしているかと思うと、バジャマや歯ブラシやひげ剃り道具をひつつかみ、ローマ字聖書や何かの印刷物などを鞆に押し込んで、もう外に出かけていくのであった。

グレースと私が神戸のカナダ学校に行きはじめてからは、私たちは夏休みに北陸線を通って長野まで帰ったが、直江津のすぐ町はずれの谷浜という小さな漁村で途中下車することがよくあった。両親

とハーバートが長野から来て私たちといっしょになり、美しい砂浜に近い日本式の宿屋で牧歌的な三、四日をすごしたものである。父がずっといっしょにいてくれるので、私たちは谷浜滞在のこの時が大好きだった。長野にいるとき、また軽井沢に来ているときでさえ、父はいつも福音伝道にとびまわって、いわゆる出先へ出かけていることが多かった。だが、ここ谷浜での毎日は、何の邪魔も入らなかった。私たちは泳いだり、海岸ぞいで遠くまで歩いたり、漁師がびちびち跳ねる銀色の魚を沢山網に入れてのを見たりした。

第一次大戦中の或る春に、伝道会の会議が長野で開かれ、評議員三、四人の宿所が私たちの家に割当てられることになった。父は、エープリル・フルの日はそれらしく祝うべきだという考えから、母が駄目だというのに耳をかさず、カステイル石けんを小さく切って朝食に出した。これはメープル・クリームというもので、朝食に甘い食べものを出すのは異例だが、カナダから着いたばかりだから、と父は言った。席についていたお客の一人は、朝食に甘いものは食べないと断つた。もう一人のお客は一切取って噛みついたが、あわてて水を一口飲んだ。そして、席を立て、石けんの泡をすすぎにいった。宣教師団の人びとをひやかしたものであった。「何という客のもてなし方だ。……ダニエル、今度は石けんなしにしてくれよ。」父の茶目っ気はハーバートに伝わったと見える。何年ものち、カナダ学校のことだが、

或る年のエープリル・フルの日に、ハーバートはドナルド・マクロードとチャールズ・ホームズという二人の悪友を説き伏せ、教室や寝室や食堂のある本館の屋根に登って、煙突から水を注ぎこんだからたまらない。煤が朝食の用意をしてあった食堂ばかりか、或る先生の寝室にまで流れ落ちる始末となった。学校中にその名も高い「三銃士」の喜び様はながくつづかなかつた。先生の衣類のクリーニング代は父親たちが弁償しなければならぬと申し渡された。これにはさすがに三人ともびつくり仰天、先非を悔いて神妙な気分になっていくと、係員を手伝って食堂の掃除をする仕事につけられた。ハーバートはカナダ学校ではあらゆるスポーツで名をあげたし、最後の学年には学内誌の編集者でもあった。学業の成績はすぐれていた。一九七七年、トロントでカナダ学校関係の旧友の会が開かれたとき、第十一、十二年当時ハーバートを教えたことのあるレオノーラ・パーク女史は、「ハーバート・ノーマンに対する感謝と想い出のために」そして学校宛ての百ドルの小切手を私のところへ送ってよこされた。その時添えられた手紙のなかで、女史は私にこう語っていられた。「教師というのはいひききをもつてはなりません、ハーバートは文学についていかにも鋭敏な理解力を示していましたので、かれは私の心に特別な位置を占めていました。」この小切手が口火になって、一九七八年の九月、カナダ学校に「ハーバート・ノーマン記念図書館」が設けられたのである。